醫者同志で全く反對の養育法

戸倉生

我々は教育といふことに就ては話は分るが、養育といふ方に就ては、實は分らないのである。養育といへば今更説明は要らぬのであるが、ザット先づ幼稚園時代の兒女を指すのであらうと思ふ。現實をいへば生れてから、親の膝を嚙らぬに至るまでも含まれることもあらうが、予は、ズット廣く見て生れてから小學校時代の終りまでとして述べて見たいと思ふのである。

それで養育といふことになると、單に自分の考では納りの行かぬことがあるので、ある醫者さまの考を問ふといふことになるのであるが、茲に予は實例を擧げて一問題を提供して見やうと思ふ。有體にいへば予は多くの小供を有ちながら兒童養育の主義を一定することの出來ぬ育兒なしであるからである。

予の知己に兄弟共に醫者なのがある。兄は内科婦人科を兼ねて、弟は外科專門の博士である。兄には十五を頭に五人ばかりの兄弟があり、末に二歳の幼兒がある。弟には十八を頭に、これも五人の子持ちで七歳が一番小さいのである、然るに同じく醫者でありながら二人の養育法、廣くいつて或は教育法が全然反對であるから面白い。

兄の子の方は寒い時に外出し、暑い時に日光に射られてもかまはぬ、加之水泳ぎ水いたづらをすれば、火の爲めに燒どをすることもある。棒切れを持つてあばれ廻れば、勿論喧嘩もする、巫山戯もする。能く笑つて見たり、怒つたりすることがある。轉ぶ倒れる粗忽をする。隨て中々多辯で誰にも話を仕掛け、誰から問はれてもハキ〳〵と答へる。母親は五六歳の幼童幼女に使ひ歩きをさせる。家柄は可成り立派でも、髪の毛はボサ〳〵して鼻を垂らしながら前垂に燒芋を買つて歸るところを予も予の妻も度々見た、然も女中は三人も居るの

である。斯の如き有樣であるから食物の如きも敢て下女といはず、勿論上るもの結構であらうが、輕子車引きが舌鼓を鳴らすやうな、俗に所謂豆餅でも鐵砲卷でも、南京豆でも鹽煎餅でもバリ〳〵ボリ〳〵嚙るのである。されど敢て人に向ては無禮なことはせぬ。挨拶應對などは生意氣に利巧に、やる。言など飽く迄社交的で、然も意志が強い、一寸のことで泣くやうなことがなく、恐れることもないのである。この風が今いふ十五を頭に四つ位の兒迄同じ形式でゆくのである。

この子にして此親ありといへば反對かしらぬど、父親のいふには、どうも小供は大事にしてはいけぬ。大事にすればするほど弱くなる。冬、凧でも揚げて夢中の中は水鼻を垂らし泣顏をしながら平氣で居るし、夏、水で遊ぶときは女の子でも眞裸體で天日に照らされながら、水の中でボチャ〳〵やつてケロリとして居る。結構丈夫である。それ此の暑氣に中てゝはいけぬ、室內を六十度に保て、日射病にかゝるから、外出するには、必ず帽子を冠つて傘を挿せといふやうに庇つては小供は弱くなるばかり、又下等社會で通食とする堅いものでも、まずいものでも十分消化するやうに腸胃を鍛練せねばならぬから、努めて此の方針を取る。身體ばかりではない。精神上のことでも、色々の刺激を與へて、少し位の事にはびくともせぬ魂を養つて置く。學說とか秩序とかに齷齪して居るものほど弱いから、自ら日頃の方針で小供を養育して居る。誠にキビ〳〵して居て心持ちがよいと思ふが、弟の方は全で違つて居るから面白いといふ譯である。

扨て弟の博士、先生の方でいふと、これは又飽く迄神聖的である。先づ飲食物の注意は柔きもの滋養物を撰で、夏さ寒さの衣物の注意に女中連之に任じ、出入の靴傘の用意まで毫も子供の手を下すところはない。現に此の如しであるから、精神上のこと、即ち學問勉强の仕方も靜寂を旨とし、敎

師に對しても口を聞くことをよくせぬ。他人が十言いふ中に一言も六かしい。隨て物事に恐れと疑ひとを懷き、少しもハキ〳〵せぬ。されど頭腦は惡いのではない、性質は飽く迄温良である。俗にいふ内氣一方甚しきは十五にもなる男の子が涙をホロ〳〵こぼすのである。氣の弱いと夥しい。父親なる博士の曰く小供の養育は靜かに柔かにせねばならぬ。小言などを滅多にいふとも出來ねば勿論打ち叩くことなどは嚴禁せねばならぬ。腫れ物に觸るやうな考で育てゝ行くべく、斯くしても病に犯されたり、惡い蟲が付いたりするから心配でならぬ。要するに兄のやり方は野蠻的原始的である。動物や植物なら、斯くして弱いものは亡びて仕舞ふかも知れぬが、人間は間引きをするやうなことは道德上出來ることでないから、僕は大に反對である。といふて居る。

此の兄弟の醫者樣の敎養法は全で反對の主義の下に行はれて居るのである。そこで局外から二者の結果を半ば推理的に判斷して見ると、身體の健否は無論前者が壯健である、氣の强いことも前者にある。此の中に立つて困らぬ人になるのも前者である。併し人物の高尙なのは後者である。人に尊敬を受け、人を養ふ位置に立つものは後者にある。眞の大學を成すものは敎育にある。そこで今日の實際は如何かといふと、上の男の子は同年で兩方とも中學の同級生であるが、前者の方數番上位に居るので、後者は常に前者に續行して居る、身體の方は前者は殆ど頑健無病で後者は時々頭が痛むといふやうなことである。

さて此の事實は世間にも類のあることであると思ふが、一家にして多くの兒女を有する吾等の如きものは、實際一方の方針で定めることは困難の事情がある。といふて、五人六人の子供を一々別々の方針で養育するといふことは出來ぬ話である。果してどちらにすればよいかといふ疑問が起るのである。之れを他人に質すに、或は前の醫者の說を

述べ、或は後者の説をいふ。醫者すら現に此の如しであれば、他人にはこれ以上の妙案は浮ばぬのも無理はないと思ふ。教育上では剛教育軟教育と分けることがあるに似て居るが、養育といふに至つては到底迷はざるを得ないのである。されば縱令父母の身體とか、境遇とか時候、土地とかいふやうな關係の相違があるとも、何れ此の二方針の何れをか採らねばならぬことゝ思ふが、一般世間ではどちらの養育法が多いか、富豪の子は比較的弱であるといふことは頗る考ふべきことではないか。而し極端に論ずるは宜しからずと思へば、敢て此の事に就いて賢明なる諸君の指教を待つ次第である。

精進甚急なれば、心調を亂れしめ、
精進甚緩ければ心を懈怠ならしむ、
汝當に平等に修習す可し。
心を用ゆること適當ならば道得可きなり。

味ふべき一言

如柳子

凡そ何事でも注意して見聞すれば、その事に就て種々なる問題を生じて來るものである。從てよい教訓を得ることもあり悪い影響を受けることもあり、將た幾多の疑問も生じ、他年の懸案の解決することもある、予の最近得た逸談の中に感じたることを一二紹介したいと思ふ。

(い)尺八造りの一言

尺八を知らぬ人は直段の高いのが品がよいと思ふ。音のよいことを知らずに、裝飾のよいのを買ふ。何品にもその弊があると思ふが、殊に尺八に就ては甚しい。八圓と三圓とで三圓の方が音のよいことがある。音のよいのは竹がよいのである、尺八によい竹は瘠地に出來る竹である。竹の育ち難いところは、南を受けてゐる礫确の土地で、竹は斯かる育ち難い瘠地に出來たものでなければよい音を出さぬものである。尺八造りのいつたことはこれ丈けである。されどかゝる困難な土地に育ちたものでなければ音がよくないといふ一言が味ふべきものである。

(ろ)商人の眼の向けどころ

支那の或地方では日本の朱肉を歡迎する。そこで盛んに輸出する中に、漸々粗雜なる朱肉を變造するやうになつた。或人が注意して日本の商品の信用に關するから、態々精製したものを輸出すべきに漸々粗製になるのは不都合であるといふと商人の曰く支那人は日本の朱肉を眞に歡迎して居るのではない、朱肉を入れたる硝子の入物が欲しさに買ふのであるから、中味はどんなでもよい。

これ丈けの説をよく〳〵考へたれば多くの教訓を含んで居る樣で面白いと思ふ。